

「自伝」の読書について

福沢と河上の場合



森田 明

一般に自伝を書くのがうまいと目されているのはイギリス人である。スチュアート・ミル『自伝』から『チャーチル回顧録』までのイギリス自伝文学には最先進近代国家としてのイギリス人の自己意識には一人の人間の生涯をたんに自らの個人的な回想というよりはむしろある時代と社会のドキュメントとして、つまるところ客観資料の形で投錨しておこうという感慨がみられる。日本の近代史にも古典に近い意義をもった自伝がなくはない。しかし一般的に言えば日本の場合、自伝文学という独立のジャンルが伝統として成立せず、むしろ滔々として流れる私小説文学の一分岐を形成した。この現象は「私小説」という日本特有の文学形式を生み出すに至った思想的条件が何だったのかを問題にする際必ず出てくる

主題の一角をなしている。

ところで自伝の読み方は決して文学や思想史の観点からばかり問題とされるものではない。一方で語り手を生みおとした歴史的背景と、他方でその歴史的条件と対話した個人の自由の問題が交錯し合うところに自伝の面白さがある。たとえば文体自体一九世紀中葉イギリス知識人をしばりつけていた所謂ヴィクトリアンイングリッシュで書かれているミル『自伝』は、スコットランド出身の苦学生であった父ジェームス・ミルの社会的出自が、当時のイギリス社会で一人の知識人を生み出すのにはいかに大きな困難と犠牲を強いたかを物語っている。しかしミル自伝のもうひとつの面白さは、ミルは死を覚悟するたびになぜかくも悲愴な努力で自分の自伝を

五回も書き直したのか、という人間ミルへの興味を読者にそそるところにある。ミルの幼少時からとことんミルを英才・天才に仕立て上げようとした父ジュームス・ミルの執念のありかの問題、父の執念の下で育ったミルの危機がハリエットという人妻との一〇数年間の恋でやっと保たれ得たこと、自伝の中に母を語る部分の一つとして出てこないこと（何回目かの草稿でミルはこの部分を全て削ったらしい）等々、ミル自伝は一種成育史的ミステリーに満ちていて、島崎藤村のように何でもかんでもぶちまけるスタイルになっていないところがミル研究者を引きつけているひとつのゆえんだらう。

社会的・歴史的条件との対話という観点から日本近代の自伝を考えてみた場合比較して面白いのは福沢諭吉『福翁自伝』と河上肇『自叙伝』である。前者の舞台が幕末から明治国家体制成立前期までの第一の動乱期であるのに対して、後者はほぼ制度化を完了した国家体制と日本資本主義の勃興によって生じた第二の動乱期（大正デモクラシーから日本ファシズムまで）を舞台にしており、比べて読み通すだけで行間から時代の空気の違いといったものが鮮明に伝わってくる。

このような思想的観点からする福沢・河上研究は膨大な量にのぼる。ここでは二つの自伝をむしろ人間福沢・河上の根

底にあった世界感覚（宗教意識）に着眼して紹介し、両者の面白さのありかについて少し考えてみたい。

『福翁自伝』を貫いて特徴的な福沢の精神は「笑い」である。これに対して『自叙伝』のそれは「求道」である。

福沢は譜代小藩中津の下級士族の生れで、その点で明治の群雄がおおむね幕藩体制下で冷飯を食わされた譜代藩の下級武士の出であったのと出自を同じくしているが、当の福沢には不思議と当時の志士が共有していた経世への熱が少ない。

「私のために門閥制度は親の敵でござる」というのは幼少時を語る福沢の名言の一つに数えられているが、彼の一生は「父の生涯……空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ」の線上に予想され得た「意趣返し」とは遂に相交わることがなかった。幼い頃兄に先々何になると問われて、「日本一の大金持になって思うさま金を使って見よう」と答え不興を買った末反問したところ兄の方は「真面目に『死に至るまで孝悌忠信』と唯一言で私は『へーい』と言った切りままになつた」福沢の精神には、当初より大義名分的なものをもとんとんつつ放して笑いとぼす心情が宿っていたように見える。福沢のこの特徴を示す庄巻は徳川慶喜が江戸へ逃げかえった時の江戸城中の描写に著しい。「サア大変、朝野共に物論沸騰

して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔えるが如く狂するが如く、人が人の顔を見ればただその話ばかり」といった状態の中で福沢は加藤弘之と会う。

慶喜に会うべくか、みしもを着て今後の天下の経綸を諫するごとくと頭に血がのぼっている加藤に、戦争が始まるなら逃げの準備をしたいからどうなるか教えてくれときいて「眼を丸く」され、「僕は命掛けた。君達は戦ふとも和睦しようとも勝手にしなさい、僕は始まると即刻逃げて行くのだから。」とふっかけて「プリプリ怒」られるくだりには福沢一流のユーモアが流れる。後に明治政府の気鋭の論客に転進し、かつそこでも自然法論からソーシャルダーウィニズムへと三段とびの転向を続けた加藤への皮肉が暗にここには込められている。加藤弘之の一生が短い波長の状況に埋没することによって鋭い状況適応能力をとぎすますのに向けられたのに対して、福沢のそれは時間的空間的諸条件を一旦つき離すところから生まれるところの「統一的世界像に向う開放的態度」（藤田省三）の下での転向能力と不動の方向性との結合から成立していた。福沢の一生を貫くこの種の笑いは、彼の行動をし、けの時には積み荷を捨てて舟足を早くする大型の帆船のようなものにした。

これにくらべると河上肇の一生はレールをくり返し引き直してはひたすら走り続けた小型の蒸気機関車を思わせる。

たどりつきふりかへりみれば山川を

越えては越えて来つものかな

河上が昭和七年正式に日本共産黨員になった折にこの句をものして我身を詠った時、すでに河上は五三才であった。河上の遍歴は二六才の時東大講師を放り出して無我苑なる宗教運動に飛び込み、それを棄て、やがて京大にもどり『貧乏物語』『経済学大綱』に結晶するマルクス主義者、大正デモクラシー下に開花した京大社会科学の先駆者の位置を経てふたたび昭和八年以後の地下運動へ入って行くというジグザグの行路をたどった。この間の河上の行路には常に悲愴さに満ちた求道心がただよっている。河上は『貧乏物語』の序文に「自分では之が今日迄の最上の著作だと思ふ」と書くが、弟子の榎田民蔵に「禪話道話は書中に満つ」と批判されマルキシズム理論として欠陥があると自認するや直ちにこれを絶版にしてしまう。「私という人間は、良心に疚しさを感ずると非常に弱くなるが、苟しくも信念をもって立ち上った以上、容易に他人に負ける男ではない」、「自分のような明治十年代に旧士族の家庭に生まれ、ずっと明治政府の教育を受けて来

たものが、現在の状勢下に於て斯かる境地に達するまでには如何に多くの苦勞を嘗め来たかを回顧せざるを得なかつた」、という先の入党時の自己認識は河上の一生を貫く通奏底音として、その都度の不器用な曲り角各に現われてくる。

昭和八年わずか一四〇日間の地下生活の後、元勅任官京都帝大教授河上肇は治安維持法違反で検挙され三年九か月の獄中生活を送ることになるが、獄中での河上の思想的意味での非転向を支えたのも又彼の天性の宗教的抽象能力と求道性にあった。彼は言う、「かりにも三十年の水火をくぐつて来た私の学問上の信念が、僅か半ケ年の牢獄生活によって早くも動搖を始めるという事は在り得ない」、信念(信仰)を物理的権力から超越させておきた河上のエネルギーは「宗教にあつては、科学と違って九年面壁がその本領であり、真理把握の方法である」という地点に立った「宗教(仏教)とマルクス主義」(獄中論文)を結晶させた。ノミナリズムと批判哲学の洗礼をほとんど受けることなしに学問の道を歩いた河上の精神(当然にもそこでは認識の実体化傾向が強烈である)の中に最後の地点で認識価値の自立性の確信を生み落し、もつて土俵際で彼の思想と学問を政治権力から守つたものは、逆説的にも彼の学問と切り結ぶ形で獲得された「九年

面壁」という河上一流の宗教価値の自立性であつた。これは一つのアイロニーである。

福沢と河上の間にある四五年度の世代差と社会変動、パーソナルな資質の要素を別論とすれば、この両極端に位置する精神は我国の近代思想史を貫流する二本の縦糸をかたちづけている。そして明治一〇〇年余を経た日本社会の思想的体質の主流は、一般に考えられているのとは逆に、むしろ河上型のそれがキバを抜かれ俗流化したところに結実した。過剰の真摯さとその陥穽に対する福沢の暗黙の批判は、今日の社会にあつてなお完全な市民権を得るに至っていない。

自伝を読むことの意味を、福沢の「笑い」と河上の「求道」との対比から考えてみた。ここには、果して両者は真実相交わることのない糸なのかという問が大きく浮び上る。右の問に答える為には福沢の笑いの背後に隠されていた一種の無常感と河上の熾烈な日本神秘主義的傾向との対照を探ってみる必要がある。だがこれはもう自伝読書の土俵を超えるテーマに属する。

J・S・ミル『自伝』

福沢諭吉『福翁自伝』

河上肇『自叙伝』

いずれも岩波文庫で入手可能